

農福連携（障がい者の就農）を目指す大潟村モデル

佐藤 亘

社会福祉法人南秋福祉会 大潟つくし苑

Case Report for Collaboration between Agriculture and Welfare in Ogata Village

Wataru SATO

Social Welfare Corporation "Nanshu-Fukushikai"

Keywords: 就労実習, くるみ, サルビア, 作業受託, 施設外就労

(スライド1) 本日は、まず大潟つくし苑の沿革と作業の経緯をお話しします。続きまして、農福連携のための就労実習、くるみの木による地域の活性化、サルビアで障がい者理解と地域貢献、最後に今年からはじめた農家からの作業受託についてお話ししたいと思います。

1. 大潟つくし苑とは

(スライド2) 大潟つくし苑とは、障がいを持っている方が通所する日中活動のサービスを提供している障害福祉サービス事業所といわれるものです。主なサービスの事業としては、生活介護事業と就労継続支援B型事業という2つの事業をしております。平成29年6月時点での定員はそれぞれ12名と26名になっております。今回お話しする農福連携に関する取り組みにつきましては、就労継続支援B型の利用者さんの取り組みが中心になります。

経営団体は南秋福祉会という社会福祉法人で、法人の本部は八郎潟町にある南秋つくし苑になります。その他の日中活動の事業所としては、潟上市天王にある潟上天王つくし苑、潟上市飯田川にある飯田川つくし苑の2か所があります。グループホームも2つありまして、グループホームつくしが主に男性の方、すみれが女性の方が利用しております。

左上の写真は施設の建物です。場所は、サンルーラル大潟さんを出てすぐ右手に道路があるのですが、その道路をはさんだ向かいに建物があります。この写真は5月頃に撮ったもので、菜の花がたくさん咲いていて、きれいなところにあります。

右側の地図をご覧ください。矢印で示したところが大潟村です。日中活動ですので、朝は利用者の方を自

宅に迎えに行き、帰りは自宅まで送り届けているのですが、地図上のラインはその送迎ルートです。北は三種町、能代市、八峰町まで送迎が出ております。東は五城目町と八郎潟町、西は男鹿市。こういった所を送迎車6台で送迎しております。

今日のお話し

- ❖ 大潟つくし苑とは
 - 大潟つくし苑の沿革と作業経緯
- ❖ 農福連携のための就労実習
- ❖ くるみの木による地域活性化
 - 『ふくるみ』のブランド（商標登録）
- ❖ サルビアで障がい者理解と地域貢献
- ❖ 農家からの作業受託（施設外就労）
 - 農業と福祉がWin-Winに
- ❖ 結びに

スライド1

大潟つくし苑とは

施設外観

- ❖ 障害福祉サービス事業所
 - 生活介護 定員12名
 - 就労継続支援B型 定員26名
 - 日中活動サービス（通所）
- ❖ 法人本部
 - 南秋つくし苑（八郎潟町）
- ❖ その他事業所
 - 潟上天王つくし苑（潟上市天王）
 - 飯田川つくし苑（潟上市飯田川）
- ❖ グループホーム
 - つくし（男性）、すみれ（女性）

スライド2

2018年12月30日受付。

本稿は、人間・植物関係学会2017年大会シンポジウム（6月24日、ホテルサンルーラル大潟、秋田県大潟村）における講演の録音記録をもとに、大会長（神田啓臣）が原稿を作成し、講演者がチェックしたものである。

(スライド3) 大潟つくし苑の沿革と作業経緯を説明します。

まず平成20年に南秋つくし苑の大潟分場として開設しました。主な生産活動は、製菓作業と農作業ということではじめております。それから約3年目の平成22年には、施設を利用する方が増えてきましたので、分場から独立して大潟つくし苑となりました。また翌年には、施設の南側に建物を増築して、加工設備を2部屋増設しております。

今回の話の中心になってくるのは、ここから後のことなのですが、平成26年から就労実習を始めました。これは、秋田県立大学のフィールド教育研究センターさんの協力を得て、毎年度の前期に6月、後期に10月、合わせて1年に2回実施させてもらっております。

平成27年からは、くるみの木の管理運営を行っております。くるみの木は、それまでは福クルミの会さんというボランティア団体さんが管理していたのですが、27年からは私達の方で管理運営することになりました。

平成28年、昨年ですが、大潟村の住区の花壇にたくさん咲いているサルビアの苗を供給する取り組みもはじめております。

今年、平成29年には農福連携のための施設外就労も実施しております。農家さんの圃場に出向いて、そこで作業を受託しています。

2. 農福連携のための就労実習

(スライド4) まず就労実習のいきさつを説明します。以前から、秋田県立大学の神田先生を通じて、苑の花壇に植える花苗をフィールド教育研究センターから毎年購入しておりました。また、花を植える時には学生さんと交流する機会も神田先生に設けていただいております。

そういった縁もあって、私から神田先生に、「施設の利用者さんが農業分野で就労することを見据えた活動として、フィールド教育研究センターで就労実習と

いうものをできないだろうか」と相談したところ、先生の方からも「フィールド教育研究センターの新たな地域貢献のあり方を求めていた」ということで、双方の思いがマッチングして、平成26年から実現しております。

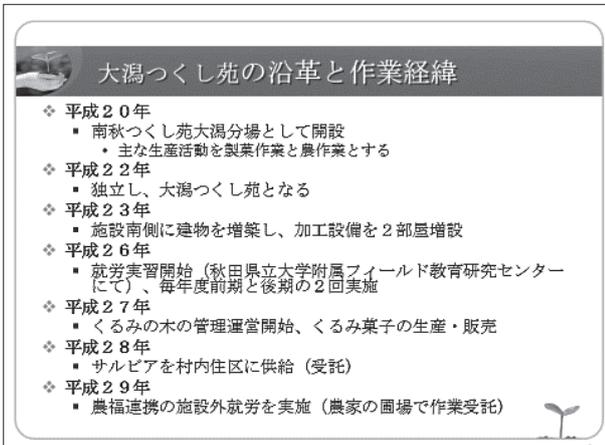
就労実習を行うことでの利用者のメリットとしては、まず「多様な人と関わりが持てる」ということがあると思います。私たち施設の職員だけでなく、実習先のフィールド教育研究センターの職員の方とコミュニケーションを取ったりとか、そういうことも新鮮な取り組みになりました。また就労継続支援B型を利用している利用者さんの中には一般就労を目指している方もいますので、そういった就労の意欲を低下しないように維持できるということもあると思います。他には「いろいろな作業種を体験できる」ということもあります。うちの施設の中では農作業とお菓子作りを中心にやっているのですが、就労実習の時には、普段やっていない仕事や農作業を体験できますので、いろんな意味で適応力につながるのではないかと思います。あとは実習を通して、評価表も作成してもらっているのですが、それによって自分自身の強みや課題を利用者さんが気づくこともできるかなと思っています。

(スライド5) これは、昨年の後期に行った実習の様子です。左側はリンゴの摘果作業です。摘果はこの時に初めてやったのですが、職員さんの丁寧な指導の下、コミュニケーションをとって、確認し合いながらすすめました。それ以外は花の仕事が中心で、真ん中の写真は寄せ植え、右は鉢上げした苗に水をやっているところ、というように日常管理の仕事が多いです。

3. くるみの木による地域活性化

(スライド6) 続きまして、くるみの木による地域活性化についてです。

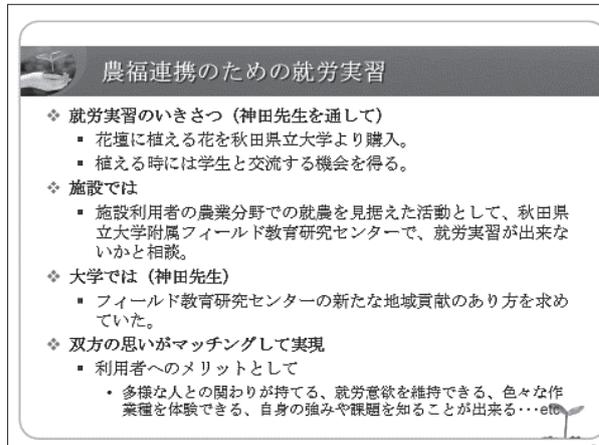
大潟村には約120本のくるみの木が植えてあるクル



大潟つくし苑の沿革と作業経緯

- ◆ 平成20年
 - 南秋つくし苑大潟分場として開設
 - 主な生産活動を製菓作業と農作業とする
- ◆ 平成22年
 - 独立し、大潟つくし苑となる
- ◆ 平成23年
 - 施設南側に建物を増築し、加工設備を2部屋増設
- ◆ 平成26年
 - 就労実習開始(秋田県立大学附属フィールド教育研究センターにて)、毎年度前期と後期の2回実施
- ◆ 平成27年
 - くるみの木の管理運営開始、くるみ菓子の生産・販売
- ◆ 平成28年
 - サルビアを村内住区に供給(受託)
- ◆ 平成29年
 - 農福連携の施設外就労を実施(農家の圃場で作業受託)

スライド3



農福連携のための就労実習

- ◆ 就労実習のいきさつ(神田先生を通して)
 - 花壇に植える花を秋田県立大学より購入。
 - 植える時には学生と交流する機会を得る。
- ◆ 施設では
 - 施設利用者の農業分野での就農を見据えた活動として、秋田県立大学附属フィールド教育研究センターで、就労実習が出来ないかと相談。
- ◆ 大学では(神田先生)
 - フィールド教育研究センターの新たな地域貢献のあり方を求めていた。
- ◆ 双方の思いがマッチングして実現
 - 利用者へのメリットとして
 - 多様な人との関わりが持てる、就労意欲を維持できる、色々な作業種を体験できる、自身の強みや課題を知ることが出来る…etc

スライド4

ミ園があります。その場所については、地図の右上にホテルサンルーラル大潟があり、大潟つくし苑がその近くにありまして、下の方に120本のくるみの木が植えてあります。

昨年の収穫量は、殻付きですけれども、1500kgでした。くるみは表年、裏年があるみたいで、去年は表年ということでした。裏年だった2年前は660kgくらいと、だいぶ収穫量が幅がありますので、今年はちょっと少ないのかなと見通しております。

収穫したくるみは1か月ほどハウスの中で乾燥させます。乾燥させた後に、実の取り出し作業を利用者さんと一緒に行きます。取り出した実は、お菓子の材料として使うほか、くるみそのものをただローストしただけの商品も県内または首都圏等に販売させてもらっております。

(スライド7) このスライドには、今までのくるみの栽培をやってこられた「福クルミの会」さんの写真を借りて載せております。おそらく平成10年頃に撮った写真かと思いますが、平成10年にこの会が発足したようです。

その3年後の平成13年から、3か年計画ということ

で、1年で40本くらいずつ植えていったと思うのですが、3年間で120本植えたようです。約6年後の平成19年には少しずつ実をつけだしたということです。平成26年、植えてから16年近く経って、くるみが大人の木になったということで大豊作となり、1700kgほど収穫したということでした。その後大潟つくし苑に管理運営を移譲しました。

福クルミの会の目的をお伺いしたところ、「大潟村の地域性を活かして防風や景観、環境を維持し、実益も兼ねたモデルクルミ園造りを目的とする」、「人々の和を大切にしてくるみ園を福祉に貢献していく」ということでした。現在は収益もでておりますし、福祉施設に管理を移譲しましたので、会の目的は果たされているのかなと思います。

(スライド8) くるみの木は、クルミ園に120本ありますけれども、くるみの需要が結構多いので、私どもも「もっとたくさん植えたいなあ」と考えています。クルミ園の南側(写真左側)には、くるみの木でなくて雑草が生えていたのですが、ここにもくるみを植える計画を立てて、整地工事を行っています。去年は約半分行いまして、今年も残り半分を行っていきたいと思っています。土地の所有者が村になりますので、村

農福連携のための就労実習

❖ 実習の様子



りんごの摘果 寄せ植え 水やり

スライド5

くるみの木による地域活性化

❖ 福クルミの会



- 平成10年 福クルミの会 発足
- 平成13年 3か年計画によりクルミの木120本を植える
- 平成19年 植樹より6年後に実をつける
- 平成26年 クルミの大豊作
- 平成27年 大潟つくし苑に管理運営を移譲

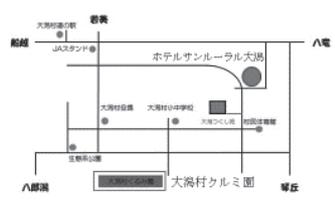
❖ 福クルミ会の目的

- 大潟村の地域性を活かし、暴風、景観、環境を維持し、実益も兼ねたモデルクルミ園造りを目的とする事
- 人々の和を大切に、くるみ園を福祉に貢献していく事

スライド7

くるみの木による地域活性化

❖ 大潟村クルミ園



- 本数：120本
- 平成28年度 収穫量：1,500kg(殻付き)
- 収穫後1か月天日乾燥させた後に、実の取り出し作業開始。
- 実はお菓子の材料として、ローストして県内・首都圏等に販売。

スライド6

くるみの木による地域活性化

❖ クルミ園倍増計画



- クルミ園の南側を整地工事(平成29年度完了)
 - クルミ園北側と同じ面積のため100本位植樹予定
- クルミの苗作り
 - カシクルミの表生栽培とオニグルミの台木に接ぎ木を想定

スライド8

の方にもお願いしていきながら、整地工事をすすめて、くるみの木をここに植えてどんどん増やしていきたいと思っております。

写真右側の苗は2年前に収穫したくるみの実生を栽培したもので、写真は去年撮ったものです。お菓子に使っているくるみの木は「菓子くるみ」といわれるもので、殻がそんなに堅くなくて、手でも割れるようなくるみです。その他にも、クルミ園には「鬼くるみ」と呼ばれるくるみの木も約10本ほどあります。鬼くるみの苗を台木にして、現在植えてあるくるみの中から大きい実をたくさんつけるくるみの枝を鬼ぐるみに接いでみようということも想定しております。

(スライド9) 収穫したくるみはこのようなお菓子になっています。このスライドを作った後も種類が増えてきてはいるのですけれども、ちょうどこのスライド作りをしたときには、この11種類でした。主に焼き菓子が中心になっております。その中でも、後でお話しします「ローストくるみ」は首都圏で注文が多くて、たくさん出荷しております。

(スライド10) ローストくるみの出荷先は、秋田県内ですと、秋田駅前にあるアトリオンの地下のお土産売り場「秋田県産品プラザ」に出荷しております。また、秋田駅構内のトピコの中にある「みんなの野菜畑」というところにも出しております。

東京都では、秋田県のアンテナショップである「あきた美彩館」と「秋田ふるさと館」で商品を販売しております。アンテナショップに関しては、テスト販売制度がありますので、それを活用して2か月間限定でテスト販売してみたところ、「ローストくるみはたくさん売れるので、今後も取引したい」ということをいただいて、継続して取引することになりました。「グルーヴィナッツ」というところはナッツ専門店です。ローストしたものではなくて、剥きぐるみをそのまま卸しています。国産のくるみなので価値が高いということから、キロ3000円で買い取ってもらっています。

福岡県の「みちのく夢プラザ」というところは、秋

田県産品プラザや秋田ふるさと館と同じ系列で、県産品プラザさんから「福岡の方にも出したい」という話をいただいて取引が始まっております。

28年度にローストくるみを出荷した数量を計算してみたら、約300kg位出荷していました。先程、「昨年は1500kg収穫した」と説明したのですが、5月頃にはもうくるみの在庫がなくなりましたので、今年の収穫が始まるまでは、くるみの商品は出荷できない状態になっております。

(スライド11) 右側にちょっとかわいらしいロゴがあります。これはオリジナルシールとして独自に作ったシールです。くるみという価値の高い商品については、パッケージやデザインとして伝える工夫が必要だと思ったのですが、どうしても福祉施設の場合、デザイン性とかそういう点が未熟なところがありますので、秋田企業活性化センターのデザイン支援センターへ相談しました。そして秋田県よろず支援拠点というところの、無料相談を通して、デザイナーさんとやりとりをしながら、このようなシールができあがりました。スライド9で説明した大潟村産のくるみを使った商品すべてにこのシールを貼っています。

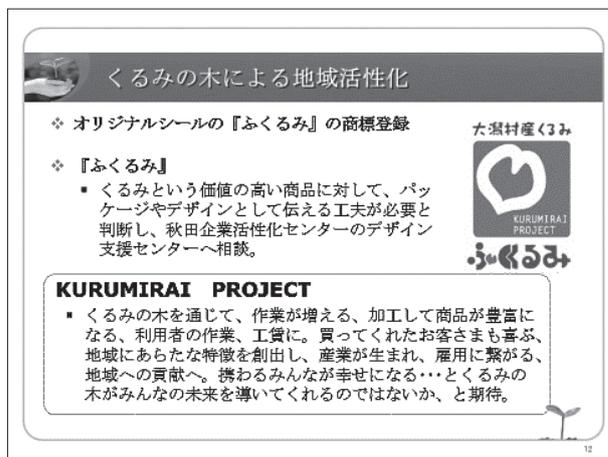
シールの上に「大潟村産くるみ」と書いてあります



スライド10



スライド9



スライド11

ので、福岡とか東京とかのアンテナショップ等で消費者が商品を手にしたときに、「大潟村で穫れたくすみ」ということの宣伝効果もあると思います。

シールの下に書いてある「ふくるみ」の「ふく」は、幸福の福と、福クルミの会の福、両方を兼ねて「ふくるみ」という名前にしております。

シール中ほどにある「KURUMIRAI PROJECT」とは、このシールを作るにあたってくるみのことをじっくり考えて作った言葉です。つまり、くるみの木の栽培や加工を通じて利用者さんの作業が増える。商品のラインナップが豊富になる。そういったことで、利用者さんの工賃が上がっていく。また、買ってくれたお客さんも喜ぶのではないかなと。さらに、地域に新たな特徴を創出することで、新しい産業が生まれ、またそこに雇用もつながってくれたなら、この活動が地域へ貢献できる1つの活動になるのかなと。そういったことで、携わるみんなが幸せになる、くるみの木がみんなの未来を導いてくれるのではないかな、という期待をこめて、「ふくるみ」というオリジナルシールを作成して、商標登録も取りました。

4. サルビアで障がい者理解と地域貢献

(スライド12) 続いて「サルビアで障がい者理解と地域貢献」についてです。

大潟村の花はサルビアになっております。大潟村さんのホームページによると、「花いっぱい運動を通じて多くの住区などで栽培されるサルビアは、鮮やかな色彩で集落地内一円に初夏から秋まで咲き誇り、生活環境を明るく鮮やかに印象づけます。村民が情熱をこめて村づくりに邁進する大潟村にふさわしい花です」ということです。

大潟つくし苑では、去年から「サルビアの種を蒔いて、ポット上げをして6月に出荷する」ということをやっております。これは(有)正八さんというところから依頼を受けてはじめました。一連の作業工程を利用者さんが行っております。花の仕事は初めてだった

のでうまくいかない点もたくさんあったのですが、昨年度は3265苗を村内の住区の花壇に供給することができました。

(スライド13) この写真は、昨年5月にハウスの中で育苗している様子です。

さて、私たち大潟つくし苑が村内住区の花壇に植えるサルビアを供給するという意味は何があるだろうか、ということについて2つ考えました。まず農福連携や地域福祉(障がい者が地域とともに暮らす、地域の役に立つ、地域とともに一緒に手を取り合って活動しているということ)が、花という形として見えやすいものになるのではないかと思います。

2つ目は、子供も障がい者も高齢者も、また行政や民間企業、教育分野も、大潟村を取り巻くすべての社会資源を活用し、1つになることで、世代や垣根を越えた全国のモデルになるのではないかなと感じております。

5. 農家からの作業受託(施設外就労)

(スライド14) 今年からはじめた農家からの作業受託(施設外就労)についてです。「平成29年度より本格実施」と書いていますけれども、現在契約している

サルビアで障がい者理解と地域貢献

❖ 大潟村の花『サルビア』

- 花いっぱい運動を通じて多くの住区などで栽培されるサルビアは、鮮やかな色彩で集落地内一円に初夏から秋まで咲き誇り、生活環境を明るく鮮やかに印象づけます。村民が情熱をこめて村づくりに邁進する大潟村にふさわしい花です。

大潟村公式ホームページ 大潟村の紹介より抜粋

❖ 平成28年度より(有)正八さんより依頼を受けて実施

- 4月に種まき、5月にポット上げ、6月に出荷する。
- 一連の作業工程を、利用者が行う。
- 平成28年度
 - 3, 265苗を村内の住区花壇に供給。

スライド12

サルビアで障がい者理解と地域貢献

❖ 障害者理解の促進と農福連携

私たち、大潟つくし苑が村内住区の花壇に植えるサルビアを供給するという事の意味は…

- 農福連携や地域福祉、障がい者が地域とともに暮らす、地域の役に立つ、地域とともに一緒に手を取り合って活動しているという事が、形として見えやすいものになるのでは!!
- 子供も障がい者も高齢者も、行政や民間企業、教育分野も大潟村を取り巻く全ての社会資源を活用し、ひとつになることで、世代や垣根を越えた全国のモデルとなる大潟村!!

ハウス内での育苗の様子(H28.5)

スライド13

農家からの作業受託(施設外就労)

❖ 平成29年度(今年度)より本格実施

- 就労実習を始めた平成26年以降、農家さんの仕事を利用者の作業として請け負う事ができないかと感じる。
- 農家の人手、担い手不足、耕作放棄地などの情報も。
- 農家と福祉施設が協力することで双方にとってメリットが生まれる取り組みが出来るのではないかと。
- 平成28年度の就労実習時に、ある農家さんとの出会いが…

イメージ図

福祉施設 職員・利用者4名 農家の畑 農家の田んぼ 農家

スライド14

農家さんはまだ2軒と少ないです。

就労実習を始めた26年以降、農家さんの仕事を利用者さんの作業として請け負うことができないかと感じはじめました。また近年、農家の人手や担い手の不足、また耕作放棄地といった情報もよく聞かれるようになってきています。そういったことで、農家さんと福祉施設が協力することで双方にとってメリットが生まれる取り組みが何かできるのではないかというふうを考えていたところ、昨年の後期の実習中にある農家さんとの出会いがありました。その農家さんも私と同じように「障がいを持っての方が何か農業することができないか」と考えていたということで、「じゃあやってみようか」ということになり、今後のモデルにもなるのではないかということで、今年からはじめております。

イメージとしては、ここに福祉施設（つくし苑）があると思ってください。こちらが農家さんの畑で、「畑で作業して欲しい」という依頼を受けて、それを職員と利用者が請け負う。これは、農家と共同するものではなくて、作業を請け負うことになりますので、農家さんは農家さんで稲作など自分の別の仕事をしに行けるということで、すごく良いのではないかなと、双方にとって有益な活動になるんじゃないかなと思っております。

（スライド15）これは施設外就労をするまでの流れです。

①まずは施設と農家さんが契約を結ぶところから始まります。「土日は苑がお休みなので、土日は作業を請け負えませんよ」とか、「利用者さんの作業時間が10:00～15:00までなので、その時間帯の中で対応することになりますよ」など、私どもは手伝えるけれども制限があるということを理解してもらって契約を結びます。

②その後には農家さんの方から業務を依頼していただきます。③その業務に関して、「私たちは何人くらいで行って、どのくらいでできますよ」と見積もりを立

てます。④それで了解をもらえたら、作業を受託して、農家さんの圃場で仕事します。この流れで②、③、④と繰り返してやりとりをします。

⑤月末で締めて、作業受託料を施設の方から農家さんに請求をかけて、⑥農家さんはその請求に基づいてその金額を支払ってもらうという流れになります。

これは作業受託料なので、2か月後くらいには、作業に出た利用者さんに、作業受託料を工賃として返すというような流れで工賃が上がるしくみになります。

（スライド16）農福連携では、よく「Win-Win」という言葉を聞きます。Win-Winとはどういうことかなと思って調べてみたら、「人との関係（取引や交渉などを含む）において、双方に得（利益）が得られる良好な関係」と載っていました。

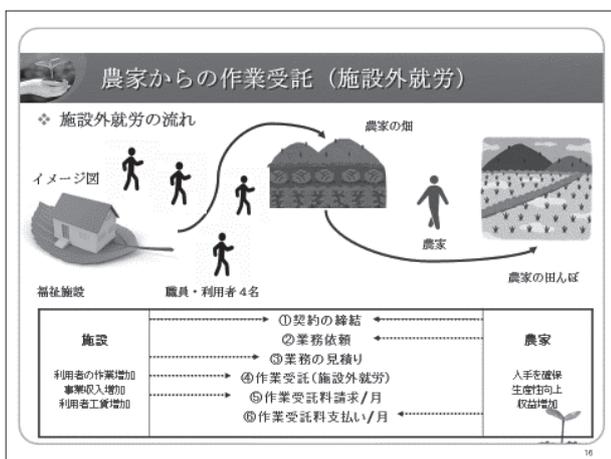
そこで、福祉サイドにとってのWinとは何かということですが、まず利用者さんの仕事が増えるということが1つあげられます。仕事があるということは、通所することの楽しさや生きがい、また達成感、協働して何か目的を達成するというような、そういった充実にもつながるのではないかなと思います。

次に、作業受託料を利用者さんに還元することで、利用者さんの労働力が対価となって工賃が上がることも可能になるということで、一般雇用とは違いますけれども、それに近い形で意識を持ってもらえるようになると思います。

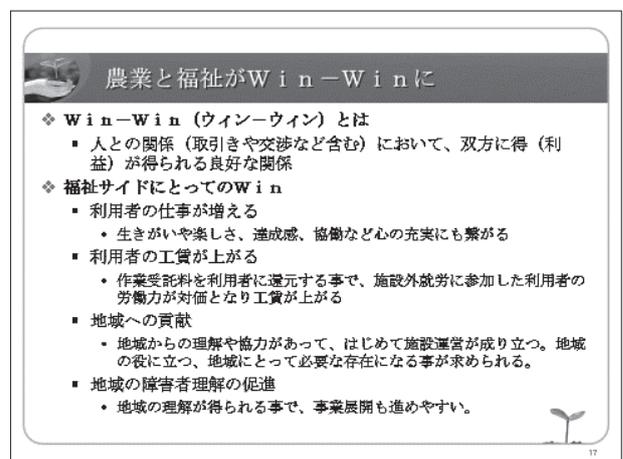
3番目は、地域への貢献ということがあげられます。地域からの理解や協力があってはじめての施設の運営が成り立っております。つまり地域の役に立つ、地域にとって必要な存在となることが施設には求められますので、農福連携は地域への貢献にもつながると思います。

あとは、障がい者理解への促進ということも得られると思いますので、今後の事業展開等もすすめやすくなるのではないかなと思います。

（スライド17）農業サイドにとってのWinですが、私は農家さんとまだそういうことを話し合っていない



スライド15



スライド16

ので、私なりの解釈ということになります。

人手を確保できることが1つのメリットかなと思います。農業では長期間の雇用が難しいと聞いております。忙しい時は忙しいのですけれども、そのあとにはそんなに人手が必要ない時期もあったりするそうです。農福連携はそういったことにも対応できる短期間のアルバイト雇用のようなものととらえてもらってもいいのかなと思います。また、施設と契約しているので必ず決まった人数を確保できるということもあります。個人個人のアルバイト雇用ですと、急な体調不良とかのため「今日行けません」ということがあるかもしれませんが、施設の場合なら利用者さんはたくさんいますので、「3人欲しい」といえば、3人をその中から選ぶことで、必ず決まった人数を確保できます。

2つ目は、生産性の向上ということがあります。作業委託することで農家さんは別の仕事に取り組めます。つまり、「作業の請け負いであって、農家と共同で作業するものではない」ということです。けれども、実際にはどうしてもはじめのうちは、自分達も素人なので、やっぱり農家さんからみてもらって、ちゃんとやれるようになるまでは指導してもらいながらすすめていく必要はありますが、2年後、3年後と仕事を続けていくうちに、自分たちにも任せられるようになってくるのではないかなと思います。

3つ目は、費用対効果が高いということがあります。1人の人件費と比較すると作業受託料の方が費用対効果が高いのではないかなと思います。仮にですけれども、1時間1000円で1人を雇用する、つまり1人で1000円に対して、受託では利用者1人1時間500円で3名確保するというので、そこに職員も入りますので4人で1500円、これは4人の方がちょっと高いのですけれども、人手としては4人いますので、単純作業を繰り返すものですか、人数がいた方が効率が良い仕事であれば作業効率は高いのではないかなと思います。また作業受託中の利用者さんへの指示は施設の職員が行いますので、障がい者への接し方が分からないという

農家さんがいたとしても、そういった心配もあまりないのかなと思います。

こういったことを踏まえて、人手の確保による生産性の向上と費用対効果などを考えると、収益増加につながるのではないかなと考えております。

(スライド18) これは今年3月のことです。ちょっと草が見つらいのですが、白っぽいのが草です。「草をきれいに刈って、ならして欲しい」という依頼を受けました。ハウス4戸の草刈りを、1日4時間の作業時間で2日間で完成して、このような状態のものになりました。

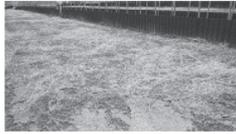
6. 結びに

(スライド19) 農福連携を目指す大潟村モデルということでもとめます。

大学での就労実習を通じて、施設外での作業に対応するための訓練につながっております。くるみの木の栽培・商品化によって、大潟村のPRと宣伝、経済効果にも期待できるのかなと思います。サルビアの花を村民の皆さんに供給し、障がい者理解も深めて、地域貢献にもつながると思っております。

また施設外就労を行うことで、大潟村の農業への手

農家からの作業受託（施設外就労）

- ❖ 施設外就労の様子（ビフォー）

- ❖ 施設外就労の様子（アフター）


ハウス4棟を1日4時間×2日で完成



スライド18

農業と福祉がWin-Winに

- ❖ 農業サイドにとってのWin（になるのでは）
 - 人手を確保できる
 - ・ 長期間の雇用よりも短期間のアルバイト雇用のようなもの。
 - ・ 施設と契約しているから、必ず決まった人数が確保できる。
 - 生産性の向上
 - ・ 作業委託することで、農家さんは別の仕事に取り組める。
 - ・ 作業を請け負うため、農家と共同で作業するものではない。
 - 費用対効果が高い
 - ・ 一人の人件費と比較すると作業受託料の方が費用対効果が高い。
 - ・ 1時間1,000円で1人の雇用 対 利用者1人1時間500円で3名確保。
 - 1人で1,000円と4人で1,500円、4人の方が作業効率高い。
 - また、作業受託中の利用者への指示は施設職員が行う。
 - 収益の増加
 - ・ 人手の確保による生産性の向上と費用対効果などを考えて、収益の増加に繋がるのではないかなと考えられる。

スライド17

結びに

- ❖ 農福連携（障がい者の就農）を目指す大潟村モデル
 - 大学での就労実習を通して、外での作業へ対応するための訓練を!!
 - くるみの木の栽培・商品化により大潟村のPRと宣伝、経済効果を!!
 - サルビアの花を村民の皆さんに供給し障がい者理解と地域貢献を!!
 - 施設外就労を行い、大潟村の農業への手助けを!!
 - ・ 施設（利用者）にとってのメリット、農業（農家）にとってのメリットを共有し、どちらか一方にとって得があり、一方が負担が大きくならないよう、双方にとって有益になるよう行えたら。
- ❖ 現在、まだ契約している農家さんは少ないですが…
 - 大潟村の『農福連携包括的支援システム』を活用し、地域と一体となり農福連携を進めていく事を目指します。
 - 県内で唯一人口が減少しない自治体と言われている大潟村。農福連携は、雇用の創出や産業の発展、今以上に魅力のある大潟村になるための大きな役割を担っていると思います。



スライド19

助けになるかなと感じております。今後は施設にとってのメリット、農業（農家）にとってのメリット、それらを共有して、どちらか一方に得があって一方の負担が大きくなるないように、双方にとって有益になるように行えたらと思っております。現在2軒との契約しかしていませんけれども、今後は大潟村の農福連携包括的支援システムを活用して、地域と一体となって農福連携を進めていけたらと思っております。

県内で唯一将来も人口が減少しない自治体と言われている大潟村で、農福連携を行いながら雇用の創出や産業の発展、また今以上に魅力のある大潟村になるための大きな役割を担っていただけるのではないかなと思っております。

（スライド20）最後に、今回は農福連携の話が中心でしたけれども、お菓子の写真をちょっと紹介します。左が首都圏に出荷しているローストくるみです。他は、昨年お歳暮用に販売した3つの商品です。右から3番目は秋田杉を使ったオリジナル木箱にくるみを使った商品の詰め合わせ、右から2番目がパウンドケーキ3種類、右端は新作クッキーを3つ入れて作っております。お歳暮に関しては、フェイスブックで情報発信したら、県外の全く知らない人から注文をいただいて発送したということもあります。農福連携やお菓子の情報発信としてフェイスブックを活用していますので、今後何かあれば見ていただきたいなと思います。

最後になりますけれども、平成20年に大潟つくし苑が開設して今年で10年目を迎えます。今までは「つく



結びに

◆ 最後に少しだけ…また大潟つくし苑の紹介

◆ 大潟つくし苑の最近の活動の様子を発信

- 大潟つくし苑フェイスブックは
こちらのQRコードよりご覧になれます

どうぞご清聴ありがとうございました。

スライド20

し苑て何だ」みたいな人も多かったと思うのですが、こうやって地域の皆さん、大潟村さんからのご理解とご協力を得て今までやってこれることができたと思っておりますし、大潟村という土地だからこそ、自分たちはこういった特徴のある活動もできてこれたのかなあと考えていますので、そこは毎日感謝の気持ちでいっぱいなんです。

これから先に関しては、逆に皆さんの力になれるように、「つくし苑があって良かったな」とか「つくし苑がいてくれて助かる」とか、そういうふうに関われる存在、またそういった組織にしていきたいと思っています。本日はどうぞご清聴ありがとうございました。